

インドの文献に見られる7の数

—セム語文化圏から伝わった文化要素—

小林 信彦

A

最古のインド文献に見られる7の数

インド最古の文献『リグ-ヴェーダ』(ṛg-veda)の讃歌では、7の数が好んで使われている。7詩節から成る讃歌があり、7層の祭壇が設けられる。7季節に7方位、そして7神界と7韻律が数えられ、7種の家畜と野獣、7種の呼吸に言及されることがよくあり、婚礼で花嫁が歩むのは7歩である。火の神アグニ(agni)には7人の妻、母、または妹がいて、7個の舌または炎がある。太陽神スーリヤ(sūrya)には7匹の馬がいるし、北斗七星に同定される7人の聖者(ṛṣi)がいる。そして、7人で組を成す悪魔もいる。

ホプキンス(Edward Washburn Hopkins)によると、同じようにインド人に好まれた3の数に比べて、二つの点で7の数は扱いが異なっていた。すなわち、『リグ-ヴェーダ』で7は3に比べて神聖さが劣り、数詞“sapta”が表したのは実際の数値ではなく、「数が大きい」/「多く」(bahu)という意味であった。¹⁾

そして、“saptahan”(7を殺す者)が実際に意味するのは「多くを殺す者[インドラ]」であり、“saptapada”(7の場所)が実際に意味するのは「多くの場所」であった。また、“saptabudhna”(7の底がある)が実際に意味したのは「多くの底がある[大海]」であった。“saptapadi”(7歩歩む

女) が実際に意味したのは「多くの歩を歩む女」であったが、後にこの意味が忘れられて、婚礼の場で花嫁は祭壇の周りを文字通り7回歩むことになった。

インドでは7が強化されて、 3×7 となることがある。²⁾『リグ-ヴェーダ』の成立年代に二つの層があり、第2巻から第7巻までが古く、これに第1巻と第8巻から第10巻までが後で加えられた。『リグ-ヴェーダ』の古層(2-7巻)で7であったのが新層(1巻, 8-10巻)ではよく 3×7 になる。

5.1.5 と 6.74.1 で7であった贈り物は、1.20.7 では 3×7 になっている。そして、「[アグニの秘密の]場所」(pada) は、1.72.6 で 3×7 になっている。また、1.191.12-14 には 3×7 の小さな雀(viṣpuliṅgaka)と 3×7 の雌孔雀(mayūri)が見える。8.69.7 では 3×7 のマルト(marut)が登場し、8.96.2 ではインドラが破壊した山頂は 3×7 となっている。9.70.1 で 3×7 の雌牛が乳を出し、10.64.8 では 3×7 の流れが見え、10.90.15 では 3×7 の薪の山に言及されている。 3×7 という数表現の形式は、2巻-7巻の古層部分には見られない。³⁾

このように、インド人は古い時代から7を好んだが、インド人と言語の起源を同じくする諸民族(印欧語を使う諸民族)の間で、最も重んじられていた数は3と9であり、⁴⁾ 7ではなかった。キース(Arthur Barriedale Keith)によると、インド、イラン、ギリシャ、ローマ、ケルトの文献で特に好まれている数は3と9であり、後代の個別事象である可能性がないわけではないが、すでに祖語時代にこの二つの数が神聖さを連想させるものであったことが示唆される。⁵⁾ ケルトとゲルマンとスラヴの神話では7が9を凌ぐようになるが、これはユダヤの影響らしい。⁶⁾

B

インドに導入されたバビロニアの七曜

『七曜攘災決』⁷⁾ という奇妙な文献が中国に伝わっている。インド文献の翻訳を装ってはいるが、⁸⁾ これは中国で作られたものである。⁹⁾ “日宮”, “月

宮”，“木宮”，“火宮”，“土宮”，“金宮”，“水宮”に，それぞれ“太陽”，“太陰”，“歳星”，“熒惑星”，“鎮星”，“太白”，“辰星”を当てている。この“歳星”以下の五つの天体にはインドの5惑星 (pañca-graha) がそれぞれ対応する。“ブリハस्पティ” (bṛhaspati)，“マンガラ” (maṅgala)，“シャニ” (śani)，“シュクラ” (śukra)，そして“ブダ” (budha) がそれである。

- a) 日宮 太陽 sūrya (太陽)
- b) 月宮 太陰 candra (月)
- c) 木宮 歳星 bṛhaspati (木星)
- d) 火宮 熒惑星 maṅgala (火星)
- e) 土宮 鎮星 śani (土星)
- f) 金宮 太白 śukra (金星)
- g) 水宮 辰星 budha (水星)

ミュラー (F. W. K. Müller) によれば，トゥルファン (turfan) で発見されたソグド (soghd) 文書の中に七曜暦があり，ソグド語，中国語，トルコ語の曜日名称が併記され，さらに中国の「十干」が添えられて，木火土金水の「五行」がソグド語に訳されて書き込まれている。¹⁰⁾

バビロニア (babylonia) に始まる天文学の遺産は，西アジアで次々に受け継がれ，アレクサンドロス以降にも大きな発展があった。3世紀にパルティア (parthia) を滅ぼしたササン朝ペルシア (sāsān) は，558年頃にトルコ系の突厥と同盟してエフタル (ephthal) を滅ぼした。これに呼応するかのようには，中国天文学の躍進が始まったのは6世紀であった。そして，4世紀以降のトルキスタン (turkestan) には，ソグド語を話すイラン人が住んでいた。

一方インドには，バビロニアの「七曜」が1-3世紀にギリシャ人から伝わった。インドではこれにラーフ (rāhu) とケートゥ (ketu) を加えることがある。ラーフは空想上の天体であり，日蝕と月蝕を引き起こすとされる。ケートゥは彗星である。中国で“rāhu”は“蝕星”と訳され，“ketu”は漢字で表記されて“計都” [kei-to] が当てられた。

h) 蝕星 rāhu

i) 計都 ketu

このように、インド特有の二つの星ラーフとケートゥを加えた「九曜」/「九執」(nava-graha)も中国で知られていたが、これは明らかに仏教を通じて伝わったものである。中央アジアのイラン人コミュニティから「七曜」を受け入れたのとは別に、中国人はインドから「七曜」/「九曜」を直接に受け入れたということになろう。ちなみに、「九つの動く星」(nava-graha)への信仰はバリ島にも伝わっている。¹¹⁾

「七曜」の例からも知られるように、東トルキスタンに住むイラン人が西アジアの文化を東アジアに伝えたのは確かである。しかしながら、7を重んじる習慣については確かでない。7については、「七曜」の場合のように具体的な証拠があるわけではないし、もともとイラン人に7の数を重んじる習慣があったわけでもない。そうすると、“7を偏愛するイラン人が自分たちの好みを中央アジアの仏教コミュニティに伝えた”とは言えない。

イラン人の宗教の最古形態を伝える文献『アヴェスター』(avestā)の中で7に関連するのは、アフラ-マズダー (ahura mazdā)を取り囲む聖なる不死者アムシャ-スプンタ (aməša spənta)である。アフラ-マズダーは自らの霊であるスプンタ-マニユ (spənta mainyu)を通して六つのアムシャ-スプンタを出現させた。そうすると、スプンタ-マニユと合わせて合計7ということになる (1 spənta mainyu, 2 vohu manah, 3 spəntā ārmaiti, 4 aša, 5 xšaθra, 6 haurvatāt, 7 amərətāt)。

しかしながら、このようにアムシャ-スプンタの総数が7と言っても、アフラ-マズダー自身と同一視されるスプンタ-マニユと合わせてのことであり、7項目がすべて同一次元にあるわけではなく、もともと7という数が意図されていたかどうか疑わしい。七つの神格の名がすべて一度に挙げられるのは1箇所だけであり (yasna 47.1)¹²⁾ 他の箇所ではスプンタ-マニユの名が見えない (yasna 45.10)。¹³⁾ また、アフラ-マズダーは六つのアムシャ-スプンタと共に七つのものを創造するが、そのうちの一つは人間であり、これは道義

インドの文献に見られる7の数

を備えた存在で、他の六つの創造物を見守るべき立場にあり、ここでも7項目は同一次元にない。七つ一組のアイデアが『アヴェスター』で確立しているわけではないのである。

さて、“アーディティヤ” (āditya) という一群の神々が『リグ-ヴェーダ』で賛美されているが、その数も一つ一つの名前も一定でない。このアーディティヤをイランのアムシャ-スプンタと関連づける説がかつて優勢であった。最も熱心な主張者であったオルデンベルク (Hermann Oldenberg) によると、¹⁴⁾ 『リグ-ヴェーダ』の群神アーディティヤは、一つ一つの名前と性格を考慮して、『アヴェスター』に登場する「光り輝く七つのアムシャ-スプンタ」と起源が同じである。そして、これはもともと7個の移動する天体 (太陽/月/七惑星) である。そうすると、アーディティヤの本来の数は7ということになる。

オルデンベルクはこのように主張するのであるが、『リグ-ヴェーダ』の古い部分では、アーディティヤの数が6より多くはなく、新しい部分でも数が7となっているのは1箇所だけであり (9.114.3)、他の1箇所では8となっている (10.72.8)。ブラーフマナ (brāhmaṇa) 文献になってやっと12となる。このように、アーディティヤの数は最初から7に固定していたわけではなく、¹⁵⁾ また個々の神々の名称も、アムシャ-スプンタのどれかと一致するのは一つもないのである。¹⁶⁾

このように、最古の文献を見る限り、イラン人がもともと7の数を特に重んじたとは言えない。もっとも、セム人の7好み次第に受け入れるようになった可能性はあろう。中世イラン語文献 (bundahišn) には、悪魔アエシュマ (aešma) の7種の力について述べられているが、¹⁷⁾ 7の数が出ているのはセム文化の影響かも知れない。

また、イラン人の宗教はローマ帝国で広く信仰されたミトラ教の形成に関与したが、ギリシャ語で伝えられるミトラ信仰の典礼書に七つの祈祷が見られ、そのうちの一つは七つの移動する天体への祈祷である。¹⁸⁾ ここに認められるセム文化の影響は、ミトラ教がローマ人に受け入れられる以前に溯るの

かも知れない。

このように、セム文化に接したイラン人が7の数を重んじる習慣を取り入れた可能性は否定できないかも知れない。しかしながら、もともとイラン人が7の数字を特別視していたわけではない。岩本裕は仏教で用いられる7の起源について仮説を立てて、中央アジアでイラン人との交流が行われた結果と言うのであるが、¹⁹⁾ そのような仮説が成り立つほどの状況証拠はないのである。

『リグ-ヴェーダ』に用いられる7の特殊な用法は、印欧祖語の文化に遡るどころか、インド-イラン祖語の文化にさえ遡るものではない。インド人の7好みはインドへ来てから身についたものである。

C¹

ヴェーダ時代が過ぎてからインド文献に見られる7

このように、『リグ-ヴェーダ』以来、インドでは7の数が重んじられていた。7の数に対するインド人の関心は、インド-インド祖語の時代に遡るものではなく、まして印欧祖語の時代に遡るものではない。ヴェーダの7好みを継承して、仏教文献でも重要な個所で7が好んで用いられている。

シャーキャ-ブッダの最後の旅と死の前後の様子を伝える『マハーパリニッバーナ-スッタ』(mahāparinibbānasutta/大般涅槃經)によると、シャーキャ-ブッダが死んでから7日目に、人々はその遺体を荼毘に付した。紀元前に遡る古い話の中で、ブッダの死という重大な出来事に関して、7の数が用いられているのである。

さて、七日目に、クシナーラの町のマッラたちは思った。「我々は、踊りと歌と花輪と香で敬意を表し、礼拝し、南へ向かって、町の南へ、外に向かって、町の外へ、ブッダの遺体を運び、荼毘に付そう。」²⁰⁾

仏教文献『ラリタヴィスタラ』(lalitavistara/方廣大莊嚴經)は、紀元前にさかのぼる古い資料を使って大乘運動の同調者が編纂したシャーキャ-ブッダの伝記である。シャーキャ-ブッダの生涯で起きた出来事を記述する際に、

7の数が繰り返して現れる。²¹⁾ これを見ると、まるでブッダの人生は7づくめである。

生まれるとすぐに七歩歩き、誕生後七日目に母マーヤー (māyā) が死んだ (7)。結婚させようとする父親に対して七日の猶予を求め、公表してから七日後に妃選びが行われた (12)。王子の願いに応じて、公示の七日後に技能コンテストが行われ、王子は弓で七本の耶子の木と鉄製の猪を打ち抜いた (12)。

都の外へ遠出をしたいという王子の願いを聞き入れた王は、予定日を七日目と決めた (14)。ヨーガを学ぶために王子が付いた師匠ルドラカ (rudraka) には700人の弟子がいた (17)。村娘スジャーター (sujātā) は、七回濃縮した牛乳を王子に与えた (18)。菩提樹に至る道の両側に、神々は七宝の壇を設けた (19)。王子は七年かかって究極の真理に到達した (23)。

そして、小本『スカーヴァティーヴェーハ』(sukhāvativyūha/阿彌陀經)²²⁾ を調べると、そこに描かれているスカーヴァティー (sukhāvati/極樂) の風景には、七重の欄楯と七列の耶子の並木が見られ、七種の宝石で作られた池が見られる。

さらにまた、シャーリプトラよ、スカーヴァティ区域は七重の欄楯と七列の椰子の並木と多量の鈴によって飾られている。……さらにまた、シャーリプトラよ、スカーヴァティ区域には、七種の宝石で作られた池がある。²³⁾

また、『[プラティウトパンナブッダ]サンムカーヴァスティアサマーディ』(pratyuṭpannabuddhasaṃmukhāvasthitasamādi[sūtra]/般舟三昧經) は、紀元前1世紀から紀元後1世紀にかけて成立したと言われる文献であるが、そこには“7日7夜にわたって一生懸命にアミターバ (amitābha/阿彌陀) を心に思えば、アミターバの姿を見ることができる”という記述がある。

當に彼方の佛を念ずべし。戒を缺くを得ず。一心に念ずること、若

くは一晝夜、若くは七日七夜。七日を過ぎし以後、阿彌陀佛を見る。
覺に於て見ざれば、夢中に於て之を見る。²⁴⁾

ここに見られる7の用法には興味深いものがある。アミターバ (amitā-bha/阿彌陀) の姿を実際に目にするには、このブッダを一所懸命に心に思い続けなければならない。実現が困難な計画の完成日程として、7日間が設定されるのである。

ヴェーダ時代が過ぎてからインド文献で使われる7は、『スカーヴァティーヴェーハ』に見られるように個物を限定する場合、古いヴェーダの用法を継承するとも考えられよう。しかしながら、日数を限定する場合は単に「多く」を表すのではなく、「あることが成し遂げられるに必要にして充分な日数」を指すものであり、ヴェーダになかった新しい用法である。

C²

ヴェーダ時代が過ぎてからインド文献に見られる $7 \times \alpha$

『リグヴェーダ』に見られる7の倍数は 3×7 だけであるが、仏教文献ではこれ以外にも7の倍数が見られ、倍数が体系を成している。『リグヴェーダ』の 3×7 が古い神聖数3と新しい神聖数7とを掛け合わせたものにすぎないとすれば、「神聖さの強化」でしかないことになり、仏教文献に見られる「倍数の体系」との間にかかなりのギャップを認めざるをえない。

ヴェーダ時代以後の正統派文献にも、「7の倍数による数の決定」の痕跡が見られる。ヴェーダ時代に地獄がいくつあったのかは明確でないが、『マヌ法典』(manusmṛti) と『ヤージュニャヴァルキヤ法典』(yājñavalkya-smṛti) では、同じように $21 (3 \times 7)$ を数える。²⁵⁾

さらにまた『ブラフマ-プラーナ』(brahma-purāṇa) と『ガルダプラーナ』(garuḍa-purāṇa) と『ヴィシュヌ-プラーナ』(viṣṇu-purāṇa) では、 $28 (4 \times 7)$ の地獄が列挙されている。²⁶⁾ 地獄の数を決めるのに7の倍数が用いられているわけであり、インドで地獄はもともと7個所にあったのかも知れない。²⁷⁾

また仏教文献では、ある大事業の完成日程が7の倍数で設定されることがよくある。最大が 7×7 であり、それ以上に延長される例はなく、これが究極形態のようである。

『サッドルマプンダリーカ-スートラ』(saddharmapuṇḍarīka-sūtra/法華經)の26章では、シャーキャ-ブッダ自身が登場する。そして、この「最高の経典」を世に広めようと努力する人たちに向かって言う。“ 3×7 日の間、『サッドルマプンダリーカ』の勉強に専念する人たちがいるなら、その人たちの前に 3×7 日目に私は姿を現そう”と。そして、 3×7 日目に姿を現して人々を励ました。

〔ブッダは言った。〕「三倍の七日の間、二十一日の間、〔各地を〕歩いて(?)、この経典に専念するなら、その者たちのために、全ての人々が喜ぶ私の姿を表そう」と。²⁸⁾

同じように、それぞれの事業の完成日程として7日間が設定される例としては、『ラリタヴィスタラ』に興味深い7の羅列が見られる。²⁹⁾ シャキャ-ブッダが真理に到達した後の状況を描く際に、7日単位で日程が設定され、 7×7 日で打ち止めになっているのである。容易ならざるプロセスがすっかり終わったことを表すのに、ここでは 7×7 が用いられている。

真理に到達してから七日間は菩提樹の下を動かず(一週目)、次の七日間は広く世界を遍歴し(三週目)、さらに次の7日間は再び菩提樹を仰ぎ見て過ごした(三週目)。四週目の七日間には東の海から西の海まで遍歴し、途中で悪魔マーラ(māra)に会って死ぬように勧められたが、教団を組織するまで死ぬわけにはいかないで、これを拒絶した(四週目)。

五週目の七日間は竜王ムチリンダ(mucilinda)の宮殿で過ごし、7重のとぐろを巻いた竜王に守られた(五週目)。六週目の七日間はほかの木(山羊飼のニャグロード樹)の根元で過ごし(六週目)、七週目の七日間は再び菩提樹の根元で過ごした。(七週目)

大乘経典『バーイシャジャグル-スートラ』(bhaiṣajyaguru-sūtra/薬師

經)では、この経典を朗読することが勧められ、このブツダの像を作って灯火を備えることが勧められているが、ここでも強化された7を用いて、すべてが仕組みられている。

この経典を四十九回朗読すべきである(7×7)。四十九の灯火を灯すべきである(7×7)。7体の塑像を作るべきである(1×7)。

一つ一つの塑像に、7個の灯火を灯すべきである(7×7)。³⁰⁾

そして、もし49日(7×7)経っても灯火が消えなければ、すべてがうまく行ったと知れ”と言われる。簡単に終わるはずのないプロセスがすっかり終わったことを示唆して、ここでも7×7が用いられている。

49日目になって灯明が消えないなら(7×7)、すべてはうまく行ったと知れ。そして、49本の旗を立てよ(7×7)。³¹⁾

7の倍数を用いる表現形式が現れた背景には『リグ-ヴェーダ』に見られる強化形3×7があったのであろうが、1×7に始まり7×7に至る「7の倍数の体系」は、それまでインドになかったものであり、他の文化圏から文化要素が新たに伝わった可能性がある。

D

「心の移転」を説明する際に用いられる $7 \times \alpha$ ($\alpha \leq 7$)

仏教理論の重要な項目を記述する際にも、強化された7が用いられることがよくある。この点で特に注目すべき記述が「心」の移転を論じる所に見られる。「心」の移転が完了すべき期限を定めるのに、7の数が選ばれているのである。この記述によると、古い身体を離脱した「心」は、7日または $7 \times \alpha$ 日以内に新しい身体に移転する。

ところでインド人の考えでは、人間が死ぬと「心」(vijñāna)が今までいた身体(deha)を抜け出して新しい身体に移動する。この場合、古い身体を離れてから直ちに新しい身体に侵入するわけではない。そうすると、「心」がどちらの身体にも属しないまま、かなりの時間が経過することになる。

ところが、インドでは「心」が単独で存在すると考えられていない。「心」

は常に身体と結び付いているのである。発声器官を使って思いを伝えることもできないし、手足を動かして思っていることを実現することもできない。身体は「心」の道具であり、これなしに「心」は機能しない。機能しない「心」の存在など、インド人には考えられないのである。

したがって、どのような場合もインド人の「心」は必ず身体と結び付いているのである。死んだ身体を離れてから、次の身体が発生するまで、「心」は空中を飛行しているか待機しているかであるが、その間も臨時の微小身体が用意されている。この仮の身体は“中間にあるもの”(antarābhava/中有)と呼ばれる。³²⁾

古い身体が死んだ瞬間に臨時の身体「中間にあるもの」が発生して、³³⁾これに「心」が収納されて、新しい身体まで運ばれる。この「中間にあるもの」は収納装置であり、運搬装置である。気体状の食物を摂取して、³⁴⁾それで得たエネルギーを使って超高速度で飛行する。したがって、無機物ではなく生命体である。山や岩壁を超高速度で突き抜けるので、³⁵⁾極めて微小であり、普通の人間には見えない。³⁶⁾

「心」を収納した臨時身体「中間にあるもの」は、人間の女または動物の雌の身体に移動し、その体内でしばらく待機する。やがて雄と雌の欲望が高まり、それぞれが精液と血液を一滴ずつ出すと、二つは混り合って一体となる。そして、「中間にあるもの」が運んで来た「心」がこれに侵入する。ここで「中間にあるもの」は消滅する。そして、感覚器官(indriya/根)が備わり、「心」が定着する。こうして胚が形成され、第1段階の“カララ”(kalala/羯羅藍)と呼ばれる。

「中間にあるもの」は生命体に違いないが、いわば仮の存在であり、臨時の存在に過ぎないので、収納と運搬の用が済めば消滅する。その持続時間は限られているのである。そうすると、どれだけ長く存続できるのか。「中間にあるもの」の持続可能時間という問題は、仏教ではかなり古くから学者たちの間で話題に上る問題であった。

仏教世界で広く認められている持続時間は原則的に7日である。そうする

と、前の身体が死んでから7日以内に新しく発生した胚に侵入すれば、滞りなく「心」の移転が成立することになる。では何かの事情で7日以内に新しい胚に侵入できない場合はどうなるのか。そういう場合を前もって予想して、それに備えて予防措置がとられて、もし7日以内の新しい胚に侵入できないような事態があれば、さらに7日の間に侵入できればよいとされる。このような期間延長の機会が7回あって、「中間にあるもの」は最長で49日間(7×7)の存続が可能になる。³⁷⁾

このように、インド人の世界観にとって不可欠な前提を成す「心の移転」を論じるに当たって、強化された7の数を使って問題を体系化する試みがなされた。「心」を収納しして移動する臨時の身体「中間にあるもの」について、その持続時間の体系化が徹底的に追求されたのである。そして仏教理論の展開の際にも、1×7に始まり7×7に終わる「7の倍数の体系」が効果的に使われることになった。

これに気を良くしたのか、胚の発生に止まらず胚の成長にまで話が及ぶ。第1段階のカララに始まり、成長は段階を追って進行し、38×7日経つと完全な胎児となり、その4日後に母親の胎内から出て生まれる。この全過程で週ごとに胎児の状態が詳しく記述されているのである。³⁸⁾ 受精から誕生に至る期間が7日ごとに分けられ、妊娠の全過程が38×7+4日間として把握されたのである。

「中間にあるもの」の持続可能期間の体系を典型例として、仏教文献に見られる7の強化形7×7は、もっぱら期間を指定するのに用いられる。このような場合も7は単に「多く」を指すのではなく、「あることが成し遂げられるに充分な日数」を指すのである。しかも、間違いのない完成がさらに間違いのないことを期し、念には念を入れて、「充分な数」の日数をさらに「充分な数」だけ集めたものである。

仏教が起こった時代(前5世紀)からアショーカ王(aśoka BC 204-232)の時代(前3世紀)までの間に、インドでは7の用法に変化が起こった。そして「7の倍数の体系」が成立した。その背景に考えられるのは、インドに

「七曜」をもたらしたバビロニアの文化である。

E

「清浄の日」の日程確定に関与したバビロニア文化

インドで「7の倍数の体系」が成立した背後に西アジアの影響があったとすれば、これと並行して他の方面でも文化要素の移転があったはずである。バビロニアの犠牲祭とインドの犠牲祭との並行事象についてはすでに指摘されており、³⁹⁾ メソポタミア美術と初期インド美術の比較についても詳しい研究がある。⁴⁰⁾ バビロニアからインドへ文化要素の移転がある程度の規模で体系的に行われたらしい。

この点に関して注目に値するのは、“ウパヴァサタ” (upavasatha) と呼ばれる仏教コミュニティの定例行事である。⁴¹⁾ もともと、この語はもっぱら「信者のために設けられた清浄の日」を指す。そういう日が半月に3回あり、その日に信者たちはサンガ (saṃgha) へ行き、そこで一夜を過ごして清浄な生活を送り、仏教の教えについて話を聞いたのである。⁴²⁾

教団法 (vinaya/戒律) 文献の記述によると、この行事は半月 (pakṣa) ごとに8日目と14日目と15日目に行われた。

The Paribbājakas belonging to Tittiya schools assemble now on the fourteenth, fifteenth and eighth day of each half-month and recite their Dhamma.⁴³⁾

And at that time the Bhikkhus, considering that it had been prescribed by the Blessed One to recite the Prātimokkha on the Uposatha day, recited the Prātimokkha three times each half-month, on the fourteenth, fifteenth and eighth day of each half-month.⁴⁴⁾

ところで、紀元前3世紀の初めにインドを統一したアショーカは、国中に広く石碑を建てたことで知られている。その一つである第5石柱碑文には、各半月 (pakṣa) の8日目と14日目と15日目に動物の殺害を禁じる勅令が見

られる。⁴⁵⁾ これは当時の仏教社会で守られていた「清浄の日」の日付であり、仏教の保護に力を尽くした皇帝の配慮が伺われる。

仏教サンガで定められている「清浄の日」の日程（8日目-14日目-15日目）を一見しすると、第1回目と第2回目には6日の開きがあるのに、第2回目と第3回目の間には1日の開きしかなく、全体としてバランスがとれていない。このように不規則な日程の背後に何かの原則があるとは考えにくい。そうかといって、こんな日程が気まぐれに作られたはずもなかるう。8日目-14日目-15日目という「清浄の日」の日程は、一体どんな事情があって定められてのであろうか。

プシルスキー（Jean Przyluski）は、仏教文献を研究するかたわら、西アジアからインドへの文化伝達について深い関心を寄せていたが、⁴⁶⁾ 仏教コミュニティに8日目-14日目-15日目という日程が成立した背景にバビロニアの影響を認めた。

インドでヴェーダ時代に行われていた習慣では、1日目と16日目はそれぞれ半月（pakṣa）の初日（pratipad）であり、その前日の30日目と15日目に「ソーマ祭儀前夜の絶食」が行われた。こうして、毎月1日目-15日目-16日目-30日目が特別の日であった。⁴⁷⁾

一方、ウルクから出土した新バビロニアの楔形文字文書に、動物犠牲月例報告が含まれていて、毎月子山羊の犠牲が行われた日が記録されている。それは「月が上弦の日」（7日目）、「満月の日」（14日目）、「月が下弦の日」（21日目）、「新月の日」（28日目）の4回であった。⁴⁸⁾

プシルスキーによると、仏教コミュニティは各半月の最後の日（15日目）を断食の日とするヴェーダの古い伝承を継承しつつ、バビロニアの影響のもとに、各半月の上弦/下弦の日と満月/新月の日を新たに採り入れたということになる。⁴⁹⁾ ただし、インドでは上弦/下弦の日が月の8日目であった。

バビロニア: 上弦下弦の日(7日目)と満月新月の日(14日目)

ヴェーダ: ソーマ祭儀前夜の絶食が行われる日: 15日目

仏教: 上弦下弦の日(8日目)/満月新月の日(14日目) + 15日目

インドの文献に見られる7の数

仏教で「清浄の日」が制定された際に、古いヴェーダの習慣が部分的に継承されながらも、上弦/下弦の日と満月/新月の日を神聖視するバビロニアの習慣を採り入れた。その頃にバビロニアとインドの間にあった緊密な関係と盛んな交流が偲ばれる。

インドで7の数が特別扱いられているということについても、このような背景を念頭に置いて考えるべきであろう。ヴェーダ時代以後のインド文献に7の数が用いられる場合、「あるべき数がすべて揃った状態」を示唆する傾向が強い。そして日数として7の数が示される場合には、「あることが成し遂げられるに必要にして充分な日数」を指す。7を特別扱いる習慣はヴェーダ時代からインドにあったが、7が「数が充分な」/完全に揃った」を指すのは、最古の文献には見られない用法である。

一方では、紀元前4000年の昔から、空を動く天体の数が七つであることをシュメール (šumer) の人々は知っていた。そして、この数を特別視していた。そして、このシュメール文化を受け継いだバビロニアで、動く天体のすべての数である7は、「すべて」を象徴する数であった。七つあるということは、必要にして充分な数がすべて揃っているということである。そして、「日」を指す語と共に用いられる7は、「必要にして充分な日数」を指す。

F¹

『ギルガメシュ叙事詩』に見られる7の数

シュメール (BC 4000-3000) 以来の学問伝統を発展させて、バビロニア (BC 2800-1750) には高い水準の天文学があり、木星と金星と水星と火星と土星は、それぞれの動きがよく知られていた。⁵⁰⁾ バビロニアの天文学者にとって天空を移動する天体は、この五つの星に太陽と月を加えた七つであるが、この数はすでにシュメールで神聖視されていた。⁵¹⁾

7の数を特別視する習慣はバビロニアに継承されて、7は「いっぱい」/「全体」を意味するバビロニア語の単語 “kiššatu” を表す記号であった。⁵²⁾ 7の数が象徴するのは、ある限りのものが全てそろった状態、すべてが完備

した様子であった。そして、バビロニアの人々にとって、7日目の日は一つの期間が終わる日であり、過ぎた期間に犯した罪を贖う日であった。⁵³⁾

なお、西アジアで7の数が“神聖視されると同時に、悪魔に配されていた”とも言われる。「いっぱい」/「全体」を表すこの数は、確かに「不運な数」とも見なされていた。バビロニアでは、12960000 (60⁴) という数が宇宙を支配すると考えられていた。12960000日は36000年に等しく、36000 (10×60²) 年は宇宙の1サイクルを成すとされていたからである。そこで、人間の歴史でも個人の一生でも、12960000の約数は「幸運な数」と見なされ、約数でない7と11と13は、「不運な数」と見なされていた。⁵⁴⁾

さて、ウルク (uruk) の王ギルガメシュ (gilgamiš) の冒険を記した楔形文字の文献『ギルガメシュ叙事詩』⁵⁵⁾ が残っている。成立年代は紀元前2000年と言われ、それよりさらに古いシュメールの伝承を受け継ぐものである。この作品の全体にわたってあちこちに7の数が見られる。

物語に入る前に前口上があり、「すべてを見た人」⁵⁶⁾ について語られる。その末尾に「すべてを見た人」が建てた都市への言及があり、その立派な城壁に聞き手の関心を集めようとして、“「すべてを見た人」が建てた城壁をよく観察して、その大きさをとくと知れ”という趣旨の言葉がある。

そこでチェック・ポイントの一つは、建設の際に「七人〔の賢い〕人」が基礎工事を担当したかどうかということである。これは「賢い人」が全て揃うということであり、何十人も何百人いる「賢い人」の一部が関与するというのではない。抜きん出て「賢い人」が7人いて、その全員が関与するのである。

〔ウルクの城壁に上って歩き、〕七人〔の賢い〕人が基礎工事を施さなららったどうかを〔調べてみよ〕。⁵⁷⁾

ギルガメシュの暴虐ぶりに手を焼いた人々が神々に訴えたので、対抗できる勇者が粘土で作られる。“エンキドゥ” (enkidu) と名付けられたこの男は、しばらく荒れ野で獣たちといっしょに暮らしていたが、やがてギルガメシュが送った娼婦シャムハト (šamḥat⁵⁸⁾) がやって来て、人間らしい感情

を身につけさせ、人間社会の風習を教える。とりあえず最初の7夜は、人間になる第1段階の経験をするのに必要にして充分であり、シャムハトの目論みは完全に達成された。

六日と七晩、エンキドゥはシャムハトとセックスをした。⁵⁹⁾

人心地がつくの充分なだけエンキドゥはセックスする。そして、飲み食いをしたことのない粘土製人間のエンキドゥは、シャムハトに勧められて初めて飯を食う。たらふく食った後で酒を飲んだところ、大いに気分がよくなった。これで大いに人心地がつき、さらに人間らしくなったのである。

〔今までに飲んだことも食ったこともなかったエンキドゥは、シャムハトに言われて、初めて〕七杯の強い飲み物を飲んだ。⁶⁰⁾

初めて会ったギルガメシュとエンキドゥは、大いに鬨ったあげく互いに高く評価する。その後、二人は大の親友となる。やがて、力を合わせて化け物フンババ (humbaba) をやっつけようとして森へ行く。このフンババは恐ろしい化け物で、これがあると人間は誰も森へはいろいろとしなかった。森林保護のため神が住まわしていたのである。

〔森を守ろうとしたエンリル (enlil) は、人間に対する〕七重の(?) 恐怖として〔フンババを任命した。〕⁶¹⁾

フンババと恐ろしさを思い、ギルガメシュは躊躇する。いっしょにいたエンキドゥは、怯むギルガメシュを元気づける。気を取り直したギルガメシュはエンキドゥと共に懸命に闘い、フンババは殺される。

〔エンキドゥはギルガメシュを励まして行った。〕「〔フンババは〕鎖かたびらの衣服を七つ着る習慣がある。すでに一つ着ていて、六つはまだ脱いだままだ。〕⁶²⁾

女神イシュタル (ištār) がギルガメシュを誘惑しようとする。これを拒もうとして、ギルガメシュはイシュタルがこれまでにやったことを取り上げて、その気まぐれな残酷な性分を咎め立てる。

〔ギルガメシュはイシュタルに言った。〕「〔……あなたはライオンを愛したが、それを殺そうとして〕七つの穴を〔掘り〕、そしてさらに

七つの穴を掘った。』⁶³⁾

〔ギルガメシュはさらに続けてイシュタルに言った。〕「あなたは馬を愛したが、7ベール⁶⁴⁾も走るように命じた。』⁶⁵⁾

怒り狂った女神は父のアヌ神(anu)に迫って、仕返しさせようとする。天から牛を降ろして、ギルガメシュの都ウルクを破壊させよと強要するのである。父に諫られても強情に言い張る娘イシュタルに向かい、父親のアヌは何とか説得しようとして、そんなことをした場合に起こる災いについて語る。そんなことしたら、長期の凶作が起こるというのである。

〔父アヌは娘イシュタルに言った。「もしお前の言い張るようなことを私がしたら、〕穀物のない七年間がある。』⁶⁶⁾

父アヌにいくら諫められても、娘イシュタルはギルガメシュへの復讐を諦めようとはしない。

〔娘イシュタルは父アヌにさらに言い張った。〕「もし穀物のない七年間があるとも、〔私はすでに人々のために穀物を集め、家畜のために飼料を育てました。』⁶⁷⁾

ついに父のアヌは娘に屈して天の牛を作り、それを地上に降ろす。牛は地上で災害を起こすが、ギルガメシュとエンキドゥがこれと華々しく闘って、最後に勝利を収める。こうして天の牛は殺された。

その後にエンキドゥが見た夢の中で、神々は会議を開いている。「フンババと天の牛を殺した二人のうち、どちらが死ぬべきか」⁶⁸⁾を決める会議であった。死ぬべきはエンキドゥと議決される。死ぬことに決まったエンキドゥは、やがて重い病に倒れる。

神々によって死ぬことに決められたエンキドゥは、泣き叫んで激しく恨み呪い、人間世界へ導いてくれた娼婦シャムハトにさえ八つ当たりをする。やがて心が鎮まったエンキドゥは、シャムハトのために良い未来を祈願する。

〔怒りを解いたエンキドゥは、シャムハトに言った。「……〔娼婦である〕お前ゆえに、〕七〔人の子〕の母である人妻が見捨てられるように。』⁶⁹⁾

インドの文献に見られる7の数

ついにエンキドゥ死ぬ。いつまでも嘆き悲しむギルガメシュは、生き返る希望を抱いて遺体の埋葬を拒む。自らの嘆きによって、親友を再び立ち上がらせようとするのである。こうして、神々の定めた運命に対して、ギルガメシュは執拗に抵抗する。しかしながら、七日経つと友の命は帰らないと知り、ギルガメシュはやっと遺体を埋葬する。

〔エンキドゥが死んだことについて、ギルガメシュは言った。〕「七日に七夜、彼の顔から蛆虫がこぼれ落ちるまで、〔私は死んだエンキドゥを思って悲嘆に暮れた。〕」⁷⁰⁾

ギルガメシュはウルクを去り、砂漠をさまよう。ひたすら死を恐れ、今までに勝ち取った栄光はもはや慰めにならない。死を避ける方法を見つけるためには、どんな苦難も厭うまいと思う。そこで、かつて不死を得たと言われるウトナピシュティム (utnapištim) の所へ行く。

不死を得たいきさつを説明するために、ウトナピシュティムは語り始めた。それによると、神の助言に従って船を作ったという。この船は長さと同幅が等しく、⁷¹⁾ 高さも同じである。⁷²⁾ ここでは造船過程の細部に触れている。船を七層にしたのである。

〔ウトナピシュティムは語り続けた。〕「〔こうして〕私はそれを〕七つの〔階〕に分け、……」⁷³⁾

ウトナピシュティムは話を進め、とうとう船が完成したという。すると、大洪水が起こって船は流され、大嵐の中を漂流する。

〔そして、苦労に苦労を重ね、船は〕第〔七日目に〕完成した。⁷⁴⁾

〔六日にわたって猛威を振るった後、〕七日目がやって来ると、嵐と洪水は攻撃の鋒を収めた。⁷⁵⁾

やがて大嵐は止み、船はニシル山 (nišir) にぶつかったまま動かない。船に乗せていた鳥をウトナピシュティムが放つが、止まる所が見つからず、再び帰って来る。まだ陸地は現れていないのである。

〔六日の間、船は動かなかつた。そこで、〕七日目がやって来ると、私は〔船の中にいた〕鳩を解き放してやった。⁷⁶⁾

水が引いたので、山の神に多量の酒を供える。この大惨事を無事に切り抜けたのを讃えて、ウトナピシュティムは不死を与えられる。そして、これで大洪水の話は終わる。

〔水が引いた後、私（ウトナピシュティム）はニシル山頂に献酒を注いだ。〕〔酒を満たした〕鍋を七つ、そしてさらに七つ、私は〔そこへ〕置いた。〕⁷⁷⁾

ウトナピシュティムが不死を得たのは、神々に課された試練を切り抜けることができたからである。ギルガメシュは神々と接触できず、何も試練を課せられていないので、このやり方で不死を得ることはできない。それでもなお不死を得る方法を求めるギルガメシュに向かって、眠らないようにとウトナピシュティムは言う。ところが、疲れきったギルガメシュは、不覚にも寝込んでしまう。そして、七日目にウトナピシュティムが起こすまで眠り続ける。バビロニア人にとって、眠りは死の双子の弟である。⁷⁸⁾ 人間は死を克服することさえできないのであるから、死を簡単に克服することなどとてもできない。⁷⁹⁾

〔ギルガメシュが眠り始めてから毎日一個づつパンが焼かれたが、〕七番めの〔パンが……、ウトナピシュティムがギルガメシュに触れた。すると、〔ギルガメシュは〕目覚めた。〕⁸⁰⁾

落胆したギルガメシュにウトナピシュティムは海へ漕ぎ出すように勧めた。不老不死の海草が海の底深くに生えているのである。ギルガメシュは潜ってこれを採り、国へ帰って人々にもこれを食わせようとした。ところが帰る途中で海草は蛇に食われてしまった。ウルクへ帰ったギルガメシュは、冒頭にある言葉（“七人〔の賢い〕人が基礎工事を施さなららったどうかを”）を発する。

ここで物語は終わるが、これに付録が付いていて、死んだエンキドゥの魂とギルガメシュとが死後世界⁸¹⁾について問答をする場面がある。ギルガメシュは“息子が一人いる男を死後世界で見たか”に始まり、次々と発する質問の中で息子の数が一人ずつ増えていき、最後は7人になる。

インドの文献に見られる7の数

〔ギルガメシュはエンキドゥの魂に尋ねた。〕「息子が七人いる男を
〔見たか。〕」〔エンキドゥは答えた。〕「見た。」⁸²⁾

この次の行が破損しているのですが、エンキドゥの説明は分からないが、前後の文脈から見て、「息子が7人いる男」の死後世界での立場は極めて良いとされているに違いない。⁸³⁾ 息子の数として最も完全なのは七人である。⁸⁴⁾

F²

『旧約聖書』に見られる7の数

バビロニア時代以来、セム語文化圏では7の数が神聖視されていた。そして、ヘブライ人の宗教伝統では、7の数が常に「いっぱい」/「全数」を意味していた。⁸⁵⁾ 『旧約聖書』(The Old Testament)⁸⁶⁾ にも、7が現れる箇所がかなりある。そして、Genesis から Deuteronomy までに特に目立つ。

神は次々に世界を作り出した後、最後にはなほだ特殊な存在として人間を作った次第が詳細に語られる。そして、この仕事をすべて終えた時の状況が語られる際に初めて7の数が見える。もの作りの仕事を終えて7日目に休んだというのである。

そして七番目の日に、していた仕事を神は終えた。そして、していた仕事を止めて休んだ。⁸⁷⁾

『ギルガメシュ叙事詩』で“〔六日にわたって猛威を振るった後、〕七日目がやって来ると嵐と洪水は攻撃の鉾を収めた”と言われているのと同じように、「激動の六日間」と「七日目の完全停止」が合わさり、7日が1単位となって一区切りの場面展開が完結する。世界を作り出すという激しい仕事をした上で休息をとるのに、この7日は必要で充分な日数である。

『旧約聖書』の Genesis には、古いバビロニアの物語にもある洪水の話が見られる。間違った人間世界に一人だけいた「正しい人」ノア (noah) が神の命令に従って、未曾有の災害を切り抜ける。『ギルガメシュ叙事詩』にあるのと同じように、立方体の船を作ることになるが、⁸⁸⁾ その際にいっしょに連れて行くべき動物の数を指定するのに7の数が現れる。

〔そして、神はノアに言った。〕「汚れていない牡と雌の獣を七匹ずつお前は持って行くべきである。そして汚れている牡と雌の獣を。」⁸⁹⁾

牡と雌の空飛ぶ鳥も、七匹ずつ〔お前は持って行くべきである〕。地上に子孫が生き続けるように。⁹⁰⁾

このように、大洪水を逃れるために作った立方体の船にノアは牡と雌の獣を七匹ずつ船に乗せたが、動物界が完全に復活するには、これが必要にして十分な数であった。

さらに七日すると、私は四十日と四十夜の間、地上に雨を降らすつもりだ。そして私が作ったすべての生き物を私は大地の表面から滅ぼすつもりだ。』⁹¹⁾

七日が過ぎると、地上に洪水があった。⁹²⁾

そして、七番目の十七番目の日に、箱舟はアララト山 (ararat) の上に止まった。⁹³⁾

ここでノアは地上の水の引き具合を知るために船に乗せていた鳩を放つが、これもバビロニアの伝承にあるのと同じである。しかも、最初に鳩を放ったのが船が座礁してから七日目であるのも同じであり、最初に放った時に帰って来たのも同じである。⁹⁴⁾ このような細かい点まで一致しているとなると、『旧約聖書』の Genesis に古いバビロニアの物語が継承されていることを否定するのは困難であろう。

そして〔ノアは〕もう七日の間〔船に〕留まった。そして再び鳩を方舟から外へ放った。〔鳩はオリーブの葉を加えて帰って来た。ノアは地上から水が引いたことを知った。〕⁹⁵⁾

それでも〔ノアは〕さらに七日間〔船に〕留まった。そして鳩を放った。鳩はもう帰らなかった。〔こうして、ノアは大洪水を無事に切り抜けることができた。〕⁹⁶⁾

水がすっかり引き、地上は繁栄した。洪水があってから350年の後に、大勢の子や孫を残してノアは死んだ。さらに長い年月が経ち、ノアの子孫の一人にヨセフ (joseph) という者がいた。

ヨセフは年少の頃から夢解きに長じていたが、兄たちに憎まれて売り飛ばされた。エジプトで奴隷として働いていたが、濡れ衣を着せられて獄に繋がれていた。その頃、エジプト王が不思議な夢を見た。⁹⁷⁾ 太った牛と七匹の痩せた牛がナイル河から上がって来るという夢であり、良く育った麦の穂としなびた麦の穂が出て来るという夢であった。

〔エジプト王が見た夢の中で、〕 運の良い太った七匹の雌牛が川から出て来た。そして、草地上で草を食った。……⁹⁸⁾

そして、その後から七匹の他の牛が川から出て来た。運の悪い痩せた牛が。そして、川岸でほかの雌牛たちの側に立った。⁹⁹⁾

そして、運の悪い痩せた牛は、運の良い太った七匹の雌牛を食った。そこでエジプト王は目が覚めた。¹⁰⁰⁾

〔エジプト王が見た二回目に夢の中で、〕 よく育った立派な七つの小麦の穂が、一本の茎から出てきた。¹⁰¹⁾

そして、七つの細い穂が東風で吹き飛んだ。¹⁰²⁾

そして、七つの細い穂はよく育った太った穂を食い尽くした。そこでエジプト王は目覚めた。それは夢であった。¹⁰³⁾

この際に、肥えた牛と痩せた牛の数はそれぞれ七匹である。そして、良く育った穂としなびた穂の数もそれぞれ七つである。この夢を見たエジプト王には何のことかさっぱり分からなかったし、学者たちに聞いても分からなかった。そこでヨセフが呼ばれ直ちに夢解きをした。ヨセフの説き明かしによると、7頭の肥えた牛は7年間の大豊作を象徴し、7頭の痩せた牛は7年間の飢饉を象徴する。

〔そしてヨセフはエジプト王に言った。〕 「七匹の良い牛は七年です。七つの良い穂は7年です。夢は一つです。¹⁰⁴⁾

そして、その後続いた七匹の運の悪い痩せた牛は七年です。そして、東風に飛ばされた七つの空の穂は七年の飢饉です。』¹⁰⁵⁾

〔さらにヨセフはエジプト王に言った。〕 「ご覧なさい。エジプト全土に豊饒の七年が来ましょう。¹⁰⁶⁾

そして、その後七年間の飢饉が起こりましょう。そしてエジプトの土地で豊饒は忘れ去られましょう。そして飢饉が国を食い尽くしましょう。〕¹⁰⁷⁾

このように、“7年間の大豊作に続いて7年間の大飢饉が来る”と夢解きしたヨセフは、対抗策を王に提案する。豊作時の収穫を蓄えて飢饉に備える案である。これを聞いた王は、ヨセフを行政の最高責任者に任命する。ヨセフは自分の提案した案を実行した。7年続いた豊作の時に食料を備蓄していたお陰で、エジプトだけは七年間の飢饉を無事に切り抜けることができたのである。¹⁰⁸⁾

Genesis の中で7の数が見られるのはこれくらいである。『旧約聖書』の他の部分について言うと、Exodus¹⁰⁹⁾ に続いて Leviticus¹¹⁰⁾ と Numbers¹¹¹⁾ と Deuteronomy¹¹²⁾ に7が目立つものの、それ以後にもかなり見られ、¹¹³⁾ 頻度の違いはあるとはいえ、文献全体にまんべんなく行き渡っている。『ギルガメシュ』の場合と同じように、『旧約聖書』で7の数は特別の意味で使われているのである。

7の数に関連して重要なユダヤ人の習慣はサバト (sabbath) である。バビロン追放 (BC 590-538) の後でユダヤ人が実践したサバトには、バビロニアのサバトに見られなかった著しい特徴が二つあった。「月齢にとらわれずに7日の期間を厳格に守ること」と「いかなる仕事も禁じること」である。この安息の日は不吉なものでも痛ましいものでもなく、断食をとまわなかった。「サバトは喜びと見なされること」¹¹⁴⁾ が期待されている。

注

- 1) Edward Washburn Hopkins, “The Holy Numbers of the Rig-veda,” *Oriental Studies: A Selection of the Papers Read before the Oriental Club of Philadelphia*, Boston, 1894, pp. 141-159.
- 2) Hopkins, “Numerical Formulae in the Veda and Their Bearing on Vedic Criticism,” *Journal of American Oriental Society* 16, 1896, p. 279.
- 3) loc. cit.

インドの文献に見られる7の数

4) Arthur Barriedale Keith, “Numbers (Aryan),” *Encyclopaedia of Religion and Ethics* 9, ed. James Hastings, Edinburgh & New York, [Latest Impression 1980,] pp. 407-412.

5) *ibid.*, p. 412.

6) *ibid.*, p. 413.

7) 『七曜攘災決』上, 『大正新脩大藏經』21, pp. 426-452.

これはもともと三巻本であったが、上巻だけしか残っていない。

8) この文献の編纂者は西インドの出身であるとされている (*ibid.*, p. 426, b.22: 西天竺國婆羅門僧金俱吒撰集之)。

9) この文献には、まず「日宮月宮木宮火宮土宮金宮水宮占災攘之法」について述べられ、続いて「宿度法」と「二十八宿」と「九曜息災大白衣觀音陀羅」が説明される。さらには「北斗七星眞言」への呪文、そして「日天」から「計都」まで、九つの星への呪文が記されている。木火土金水の「五星」と「十二宮」の組み合わせが表で示され、それぞれの場合に有効な占いの方法が教えられている。

10) F. W. Müller, “Die ‘persischen’ Kalenderausdrücke im chinesischen Tripiṭaka,” *Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften*, Sitzung der Philosophisch-historische Klasse 25, Berlin, 1907, pp. 458-465.

11) T. Goudriaan and C. Hooykaas, *Stuti and Stava (Baudha, Śaiva and Vaiṣṇava) of Balinese Brahman Priests, Verhandelingen der Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen*, Afd. Letterkunde, Nieuwe Reeks, Deel 76, Amsterdam/London, 1971, pp. 33-36.

今もバリ島に残っている「九つの動く星への讃歌」(navagraha-stava)は9詩節から成り、それぞれに一つ一つの星が記述されている。インドの作詩法を倣って、バリ島の詩も1詩節が四つのパーダ(pāda)なら成るが、この讃歌ではそれぞれ第1パーダに星の名前がその色彩と共に挙げられ、第2パーダでは“それぞれの星が同じ色彩の上着と花を着けている”と言われている。第3パーダではそれぞれの星について好みの食いが挙げられ、第4パーダではそれぞれの星が讃えられている。7番目の星を例に採ると、“土星は色が黒、着けているのが黒い上着と黒い花、好物が肉、この土星に礼拝”となっている。

サンスクリットの出来から見て、この讃歌はバリ島で作られたのは間違いないが、色彩と好物を添えた「動く星」の記述はインド直伝のものである(Vaikhānasa-grhyasūtra 4.13)。この讃歌で礼拝の対象となっている九つの「動く星」のそれぞ

れについて、名前と色彩と好物を表にすると次のようになる。

動く星の名前	色彩	好物
1) āditya (太陽)	rakta (赤色)	guḍa (糖蜜)
2) soma (月)	śukla (白色)	pāyasa (乳糖で煮た飯)
3) aṅgāraka (火星)	rakta (赤色)	sana (?)
4) budha (水星)	śyāma (暗青色)	dadhi (凝固乳)
5) guru (木星)	pīta (黄色)	ghṛta (バター)
6) śukra (金星)	śukla (白色)	kṣīra (乳)
7) śanaiścara (土星)	kṛṣṇa (黒色)	māṣa (肉)
8) rāhu	kṛṣṇa (黒色)	māṣa (肉)
9) ketu	dhūma (くすんだ色)	citra (雑食)

写本が二つしか残っていないことを見て (Goudriaan/Hooykaas, op. cit., p. 34), この讃歌がバリ島でそれほど知られているとは思えない。また、この讃歌の記述を基に、7や9の数に特別な意味を持たせる慣習がバリ島にできた気配もない。

- 12) Jean Kellens et Eric Pirart, *Les textes vieil-avestiques*, volume 1, introduction, texte et traduction, Wiesbaden, 1988, p. 167, Yasna 47.1:

spəntā mainiiū, vahištācā manaṅhā
 hacā aṣāt, śīiaoθanācā vacaṅhācā
 ahmāi dan, hauruuātā aməṛətātā
 mazdā ̅χšaθrā, ārmaiti ahurō

Grâce au bénéfique état d'esprit, par la très divine pensée, l'acte et la parole (rituels), (les consécérations) harmonieuses lui confèrent l'immortalité et l'intégrité. Le Maître Mazdā est avec l'emprise et la Déférence.

ここでは (1) から (7) まで七つが全部そろっている。

- (1) spənta- mainiiu-: le bénéfique état d'esprit
- (2) vahišta- manah-: la très divine pensée
- (3) aša-: (les consécérations) harmonieuses
- (4) hauruuātāt-: l'intégrité
- (5) aməṛətātāt-: l'immortalité
- (6) ̅χšaθra-: l'emprise
- (7) ārmaiti-: la Déférence

- 13) *ibid.*, p. 157, Yasna 45.10:

tān nā yasnāiš, āmatōiš (7) mimayžō

インドの文献に見られる7の数

yā anmāni, mazdā sraui ahurō
hiiat hōi aṣā (3), vohucā cōišt mananḥā (2)
χšθrōi (6) hōi, hauruuātā (4) amərətātā (5)
ahmāi stōi dan, təuuiši utaiiūiti

Nous nous efforçons de gratifier, par les consécérations de la Dénérence, le Maître Mazdā, qui est renommé pour le souffle que (la Dénérence) lui a conféré par l'Harmonie et la divine Pensée. Lors de l'emprise (rituelle) sur lui, (les louanges et les consécérations) lui donnent l'intégrité et l'immortalité, la jouvence et la tonicité, pour qu'elles soient à lui.

ここでは (1) spənta mainyu (le bénéfique état d'esprit) が挙げられていない。

14) Hermann Oldenberg, *Die Religion des Veda*, Stuttgart/Berlin, 1923, pp. 186-187; "Varuṇa und die Ādityas," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 50, 1896, pp. 50-54 (p. 43 ff.).

15) Arthur Anthony Macdonell, *Vedic Mythology*, Strassburg, 1895, pp. 43-44.

アーディティヤの総数として、6より多い数が『リグ-ヴェーダ』で挙げられることはない。六つの名前が挙げられているのも、『リグ-ヴェーダ』2.27.1の1箇所だけであり、そこには“mitra”“aryaman”“bhaga”“varuṇa”“dakṣa”“amṣa”が出ている。『リグ-ヴェーダ』の最終巻では、ある箇所では7と言われ、ある箇所では8と言われる。そして、いずれの箇所でも名前が特定されていない。『アタルヴェー-ヴェーダ』(atharva-veda)の1箇所では、“アーディティ (aditi) には8人の息子がいた”と言い、別の箇所でその名前が記されている。『シャタパタ-ブラーフマナ』(śatapatha-brāhmaṇa)の1箇所ではアーディティヤの数を8とし、他の2箇所では12として1年を構成する月と同一視している。ヴェーダ時代が過ぎて古典時代になると、アーディティヤは常に12の太陽神であり、12の月と結びつけられていて、ヴィシュヌ (viṣṇu) が加わって最高の存在として活躍する。

16) ヒレブラント (Alfred Hillebrandt) が指摘するように (*Vedic Mythology* 2, trans. S. R. Sarma, Delhi, 1981, p. 62), そしてオルデンベルク自身が認めるように (“Varuṇa und die Ādityas,” p. 51), 『アヴェスター』では (2) ウォフ-マナフ (vohu manah) 以下のものはすべて抽象概念である。そしてヒレブラントの指摘するように (op. cit., loc. cit.), 『リグ-ヴェーダ』でミトラ (mitra) は常にアーディティヤの一つであるが、『アヴェスター』でミスラ (mithra) がアムシャ-スプンダの一つであることは決してない。また、『リグ-ヴェーダ』でアリヤマン (aryaman) はしばしばアーディティ (aditi) の息子と言われ、いくつかの箇所ではバガ (bhaga)

もそうである。ところが『アヴェスター』では、アリヤマンとバガのいずれも、アムシャ-スプンダに所属する存在ではない。

- 17) *Pahlavi Texts*, part 1, trans. E. W. West, Oxford, 1880, pp. 107-108: 15. Theirs are the same appliances as the demon Aeshm's, as it says that seven powers are given to Aeshm, that he may utterly destroy the creatures therewith; with those seven powers he will destroy seven of the Kayân heroes in his own time, but one will remain.

同じ文献で、七つを数える記述はその外にも次のような例が見られる。これも『アヴェスター』の伝承を継承するものではなく、イラン固有の文化とは断定できない。

ibid., p. 128: 29. Afterwards, Aûharmazd seizes on the evil spirit. Vohûman on Akôman, Ashvahist on Andar, Shatvairô on Sâvar, Spendarmad on Tarômat who is Nâûnghas, Horvadam and Amerôdad on Tâirêv and Zâirik, true-speaking on what is evil-speaking, Srôsh on Aeshm.

- 18) A. Dieterich, *Eine Mithrasliturgie*, Leipzig, 1903, p. 90.
- 19) 岩本裕, 「中陰」, 『日本佛教語辞典』, 東京, 1988, pp. 522-523: “西アジアにおいて「七」の数字は神聖視されると同時に、悪魔に配せられていたことから、七曜と同じように、中央アジア方面における文化交流の結果、仏教徒の通念となったかと考えられる。”
- 20) Mahāparinibbānasutta, *Dighanikāya*, ed. Thomas William Rhys Davids & J. Estlin Carpenter, 2, London, 1889, pp. 159-160: atha kho sattamaṃ divasaṃ kosinārakānaṃ mallānaṃ etad ahoṣi. mayaṃ bhagavato sariraṃ naccehi gitehi vāditehi mālehi gandhehi sakkarontā gurukarontā mānenta pūjenta, dakkhiṇena dakkhiṇaṃ nagarassa haritvā bāhirena bāhiraṃ dakkhiṇato nagarassa bhagavato sariraṃ jhāpessāmaṃti.
- 21) *Lalitavistara*, ed. R. Mitra, Calcutta, 1877.
- 22) *The Smaller Sukhāvativyūha*, *Sukhāvativyūha*, ed. Friedrich Max Müller and Bunyiu Nanjio, Oxford, 1883, pp. 92-100, Appendix II.
- 23) ibid., p. 93, 9-15: punar aparaṃ śāriputra sukhāvati lokadhātuḥ saptabhir vedikābhiḥ saptabhiḥ tālapamktibhiḥ kiṃkiṇjālais ca samalamkṛtā punar aparaṃ śāriputra sukhāvatyāṃ lokadhātu saptaratnamayyaḥ puṣkariṇyaḥ |
- 24) 支婁迦讖譯, 『般若三昧經』上, 『大正新脩大藏經』13, p. 905, a.15-17: 當念彼

インドの文献に見られる7の数

方佛 不得缺戒 一心念 若一晝夜 若七日七夜 過七日以後 見阿彌陀佛 於覺不見
〔者〕^(a) 於夢中見之

- 25) 大罪 (mahāpātaka) を犯した者は、懺悔の手續き (prāyaścitta) を踏まない
と、地獄 (naraka) へ行かなくてはならない。このような連中が行くべき地獄に
ついては、法文献 (dharma-śāstra) で21 (3 × 7) の数が挙げられている。列挙
されている地獄はどの文献でもほぼ同じであるが、その一つ一つについて説明はど
こにもされていない。

Manusmṛti, ed. Vāsudevaśarman, Bombay, 1933, 4.88-90, p. 248:

tāmisram andhatāmisraṃ mahārauravarauravau | (1-4)
narakaṃ kālasūtraṃ ca mahānarakam eva ca || (5-6)
saṃjivanaṃ mahāvīciṃ tapanam saṃpratāpanam | (7-10)
saṃghātaṃ ca sakākolaṃ kuḍmalaṃ pratimūrtikam || (11-14)
lohaśaṅkum rjiṣaṃ ca panthānaṃ śālmaliṃ nadim | (15-19)
asipatravanaṃ caiva lohadārakam eva ca || (20-21)

Yājñavalkyaśmṛti, ed. Nārāyaṇa Rāma Ācārya, Bombay, 1918, 3.222-224,
p.406:

tāmisram lohaśaṅkum ca mahānirayaśālmali |
rauravaṃ kuḍmalaṃ pūtimṛttikaṃ kālasūtrakam ||
saṃghātaṃ lohitodaṃ ca saviṣaṃ saṃpratāpanam |
mahānarakakākolaṃ saṃjivanaṃ mahāpatham ||
aviciṃ andhatāmisraṃ kumbhipākaṃ tathaiva ca |
asipatravanaṃ caiva tāpanam caikaviṣakam ||

さらに、*Viṣṇudharmasūtra* 43.2-22 と *Agnipurāṇa* 371.20-22 で21の地獄が
挙げられている。

- 26) Willibald Kirfel, “Die Höllen,” Die erste Gruppe, *Die Kosmologie der Inder*,
Bonn/Leipzig, 1920, pp. 148-152.

- 27) *Vedāntasūtra* は地獄の数を7とする。これが地獄の数に関して最古の伝承を伝
えるものと思われる。

Vedāntasūtra, 3.1.15: api ca sapta. *Śāṅkarabhāṣya* ad loc.: api ca sapta nara-
kā rauravapramukhā duṣkṛtaphalopabhogabhūmitvena smaryante paurāṇi-
kaiḥ.

- 28) *Saddharmapuṇḍarikasūtra*, ed. Hendrick Kern & B. Nanjio, St.-Petersbourg.
1912, p. 476, 26 Samantabhadrotsāhanaparivarta: ye …… asmin dharmapary-

āye trisaptāham ekaviṃśatidivasāni caṅkramābhirūdhā abhiyuktā bhaviṣyanti
teṣāṃ ahaṃ sarvasattvapriyadarśanam ātmabhāvaṃ saṃdarśayiṣyāmi |

29) *Lalitavistara*, ed. P. L. Vaidya, Durbhanga, 1958, 24, pp. 269-285.

30) *Bhaiṣajyaguruvaidūryaprabharājasūtra*, ed. Nalinaksha Dutt, Srinagar, 1930: p. 26, 6-8: navacatvāriṃśadvāre idaṃ sūtram uccārayitavyam | ekonapañcāśad dipāḥ prajvālayitavyāḥ | sapta pratimāḥ kartavyāḥ | ekaikaikayā pratimayā sapta sapta dipāḥ prajvālayitavyāḥ |

31) loc. cit., 9-11: yady navacatvāriṃśatime^{a)} divase āloko na kṣiyate veditavyam sarvasaṃpad iti | pañcarāṅgikāś ca patātā ekonapañcāśa [-dadhikāḥ] kartavyāḥ |

a) 写本Cの読みを採って、刊本の“ekonacatvāriṃ^o”を改める。

32) Vasubandhu, *Abhidharmakośabhāṣya*, ed. Prahlad Pradhan, 1975, p. 124, 3.23cd: sa punar maraṇāt pūrva upapattikṣaṇāt paraḥ: そして、「[中間にあるもの]」は「古い身体の」死の後、「新しい身体の」発生の瞬間の前に「存続する」。

『阿毘達磨大毘婆沙論』69, 『大正新脩大藏經』27, p. 356, a.2-4: 問 何故中有或名中有 答 居死者後 在生者前 二有中間 有自体起 欲色有撰故 名中有: 問ふ。何故に中有は或は中有と名づくや。答ふ。死者の後に居て、生者の前に在り。二有の中間に自体の起る有り、欲と色の有を撰するが故に、中有と名づく。

「[前の身体と次の身体の間であって、] 中間的に存在するもの」(what intermediately exists) という意味である (yo' ntarā bhavati so 'ntarā bhavaḥ)。

33) *Yogācārabhūmi*, ed. V. Bhattacharya, Calcutta, 1957, pp. 18-19: anantarasamutpannatvāc ca tasyātmabhāvasnehasya pūrvaprapañcābhiratihetuparibhāvitatvāc ca śubhāśubhakarmaparibhāvitatvāc ca tasyāśrayasya taddhetudvayam adhipatiṃ kṛtvā svabijād antarābhavasya taddeśanirantarasya prādurbhāvo bhavati | tulyakālanirodhotpādayogena tulāgraprāntanāmonnāmavat ||

『瑜伽師地論』1, 『大正新脩大藏經』30, p. 282, a.13-17: 由我愛無間已生故無始樂著戲論因已薰習故 淨不淨業因已薰習故 彼所依體 由二種因増上力故 從自種子即於是處 中有異熟無間得生 生死同時如秤兩頭低昂時等: 我愛、無間に已に生ずるに由るが故に、無始より戲論を樂著するの因、已に薰習するが故に、淨と不淨の業の因、已に薰習するが故に、彼の所依の體、二種の因の増上力に由るが故に、自らの種子より、即ち是の處に於て、中有の異熟、無間に生を得。生死の時を同じくすること、秤の兩頭の低昂の時の等しきが如し。

インドの文献に見られる7の数

死の瞬間に「自分の生存への愛着」(ātma-sneha/我愛)が生じ、潜在していたエネルギーが発現して、「中間にあるもの」と呼ばれる物体に転換される。天秤の右端が上がるのと同時に左端が下がるように、身体の死と「中間にある物」の発生は同時に起こる。

34) 『阿毘達磨大毘婆沙論』70, 『大正新脩大藏經』27, p. 362, c.25: 應作是說 中有食香: 應に是の說を作すべし。中有は香を食ふと。

35) *ibid.*, p. 364, a.11: 中有微細 一切牆壁山崖樹等 皆不能礙: 中有は微細にして、一切の牆壁山崖樹等、皆礙ぐることはせず。

36) *ibid.*, p. 364, b.15-17: 問 諸本有眼見中有不 有作是說 地獄傍生鬼人趣眼不見中有 唯天趣眼能見中有: 問ふ。諸の本有の眼、中有を見るや〔見〕ざるや。是の說を作す有り。「地獄〔趣〕、傍生〔趣〕、鬼〔趣〕、人趣の眼、中有を見ず。唯、天趣の眼、能く中有を見る」と。

37) *Yogācārabhūmi*, p. 20: sa punar antarābhavaḥ (1) saptāhaṃ tiṣṭhaty asaty utpattipratyayaḥ | sati punaḥ pratyayaḥ 'niyamaḥ | alābhe c(y)utvā punaḥ saptāhaṃ tiṣṭhati (2) yāvat sapta saptāhāni tiṣṭhaty utpattipratyayaṃ alabhamānaḥ | tata ūrdhvaṃ avaśyam utpattipratyayaṃ labhate |

『瑜伽師地論』1, 『大正新脩大藏經』30, p. 282, a.27-b.2: 又此中有 若未得生緣 極七日住 有得生緣 卽不決定 若極七日未得生緣 死而復生 極七日住 如是展轉 未得生緣 乃至七七日住 自此已後決得生緣: 又、此の中有、若し未だ生緣を得ずば、七日を極りて住す。生緣を得る有らば、即ち決定せず。若し七日を極りて未だ生緣を得ずば、死して復た生じ、七日を極りて住す。是の如く展轉して未だ生緣を得ず。乃至七七日住す。此より已後には決らず生緣を得。

この部分で論じられているのは、新しく発生した胚に「心」が侵入する時の状況である。性欲の高まりなど「発生の条件」(生緣)が整えば、胚が発生する。そして、その瞬間に「中間にあるもの」がそこに侵入する。したがって、「中間にある物」が侵入するのは「発生の条件」次第であり、それ自体に侵入のタイミングは決まっているわけではない(不決定)。「七日」は「中間にある物」が持続可能な期間であり、この間に「発生の条件」が整えばよい。すなわち、父親と母親がその気になればよい。

38) 『瑜伽師地論』2, p. 284, c.7-9: 於胎中經三十八七日 此之胎藏一切支分皆悉具足 從此已後 復經四日 方乃出生: 胎中の於て三十八の七日を経て、此の胎藏に、一切の支分、皆悉く具足す。此れより已後、復四日を経て、方に乃ち出生す。

39) W. F. Albright and P. R. Dumont, "A Parallel between Indic and Babylonian

Sacrificial Ritual,” *Journal of American Oriental Society* 54, 1934, pp. 107-128.

- 40) C. L. Fabri, “Mesopotamian and Early Indian Art: Comparisons,” *Études d’orientalisme à la mémoire de Raymonde Linossier*, 1, Paris, 1932, pp. 203-253.

Gisbert Combaz, *L’Inde et l’Orient classique*, Paris, 1937: L’architecture (pp. 27-61), La sculpture (pp. 62-210), L’ornement (pp. 211-225).

Irene N. Gajjar, *Ancient Indian Art and the West*, Bombay, 1971.

- 41) “upavasatha” という名詞はヴェーダ時代にさかのぼる正統派の宗教用語であり、「絶食の日」を意味し、ソーマ祭の前日を指した。祭官に犠牲祭の執行を依頼する家主は、前日に絶食したのである。正統派で用いられていたこの用語と習慣が異端の仏教にも採り入れられたのである。

なお、“upavasatha” のパーリ語形 “[u]posatha” は、中国語で“布薩” [po-sat] と転写され、“齊”（もともとの意味は「[祭りに先立って別棟に籠り、肉や酒を断って心を]整えること」）と訳された。

- 42) このように、この語の本来の意味は「信者のために設けられた清浄の日」があるが、これとは別の意味でも用いられるようになり、出家者の生活を考える場合、その方がはるかに重要である。それは「出家者のための浄化儀式」という意味である（「uposatha と pātimokkhuddesa」, 『仏教史学』30.1, 1987, pp. 1-22）。

生活規則を説明するためにサンガでは半月に1回集會が開かれた。この際に規則違反の有無を出席者に問いただす習慣ができ、告白会の性格が強くなった。こうして、生活規則の説明会（pātimokkhuddesa）は“uposatha” と呼ばれるようになった（*Vinayapiṭaka*, ed. Oldenberg, 1, p. 102; Mahāvagga, 2.3.1）。

こうして「サンガ規則の説明会」は、「罪を告白して心を清めるために滅罪浄化をする機会」に変わった。そして、「信者のための清浄の日」を指す語“upavasatha/uposatha” が、「出家者のための浄化儀式」を指すのにも用いられるようになった。この説明会/浄化儀式は、最も重要なサンガ会合であり、正規構成員全員に出席する義務があった（*ibid.*, pp. 116, 38 ~ p. 117, 2 (Mahāvagga, 2.17.6)）。

- 43) *Vinayapiṭaka*, 1, ed. Hermann Oldenberg, London, 1929, p. 101, Mahāvagga, 2.1.2: etarhi kho aññatitthiyā paribbajakā cātuddase pannarase aṭṭhamiyā ca pakkhassa sannipatitvā dhammaṃ bhāsanti.

- 44) *ibid.*, p. 104, Mahāvagga, 2.4.2: tena kho pana samayena bhikkhū bhagavatā uposathe pātimokkhuddeso anuññāto ’ti pakkhassa tikkhatuṃ pātimokkhaṃ uddisanti cātuddase pannarase aṭṭhamiyā ca pakkhassa.

45) Eugen Hultsch, *Inscriptions of Asoka, Corpus Inscriptionum Indicarum* 1, London, 1924, Fifth Pillar-edict, pp. 126-127: (J) aṭhamipakhāye cāvudasāye pamnaḍasāye tisāye punāvasune tisu cāturmāsīsu sudivasāye gone no nilakhitaviye ajake eḍake sūkale e vā pi amne nilakhiyati no nilakhitaviye.

On the eighth [lunar day] of [every] fortnight, on the fourteenth, on the fifteenth, on Tiṣyā,^(a) on Punarvasu,^(b) on the three Cāturmāsī,^(c) [and] on festivals, bulls must not be castrated, [and] he-goats, rams, boars, and whatever other [animals] are castrated [otherwise], must not be castrated [then]. (Hultsch, op. cit., p. 128)

(a) tiṣyā: [the day of] the eighth constellation

(b) punarvasu: [the day of] the seventh lunar mansion

(c) cāturmāsī: the full moon day on which a sacrifice is performed in celebration of a new season

46) Jean Przyluski, “La ville de Cakravartin. Influences babyloniennes sur la civilisation de l’Inde,” *Rocznik Orientalistyczny* 5, 1929, pp. 165-185; “Le symbolisme du pilier de Sarnath,” *Études d’orientalism à la mémoire de Raymonde Linossier* 2, Paris, 1932, pp. 482-498.

47) *ibid.*, p. 389.

48) M. C. Fossey, “États mensuels d’animaux répartis pour sacrifices — époque néobabylonienne,” *Revue des Études Sémitiques* 1, 1936, 1, pp. ii-ix.

49) Przyluski, “Uposatha, A Babylonian Element in Indian Culture,” *Indian Historical Quarterly*, 12.3, 1936, pp. 382-390.

50) A. Leo Oppenheim, *Ancient Mesopotamia*, Chicago, 1964, pp. 309-310.

バビロニアには天文事象を扱う文献が作られている。惑星と月の位置や日食と月食の時期を計算するための解法と計算結果が天文学の文献に述べられ、2年間の満月と新月、そして50年間の日食と月食が記されている。このような知識は暦作り役立った。そしてバビロニアの天文学者は、日の出と日の入りを前もって知らせることに強い関心があった。

51) Johannes Hehn, “Siebenzahl und Sabbat bei den Babyloniern und im Alten Testament,” *Leipziger Semitische Studien*, 2.5, 1907, pp. 44-52.

52) *ibid.*, p. 8.

53) *ibid.*, p. 121.

54) H. V. Hilprecht, *Mathematical Metrological and Chronological Tables from*

the Temple Library of Nippur, Philadelphia, 1906, pp. 33-34.

- 55) Alexander Heidel, "The Gilgamesh Epic," *The Gilgamesh Epic and Old Testament Parallels*, Chicago, 1963, pp. 16-101.

R. Campbell Thompson, *The Epic of Gilgamesh*, Text, Translation, Oxford, 1930.

- 56) テキスト冒頭に "[Sa] naḡ-ba i-mu-ru" とあり (Thomson, op. cit., p. 11), ハイデルは "[He who] saw everything [within the confi]ness(?) of the land" と訳している (Heidel, op. cit., p. 16)。

この“七人[の賢い]人が基礎工事を施さなかったどうかを”という言葉は、この叙事詩の巻末でも繰り返され (ibid., p. 93, XI.303-305.), 失望のあげくウルクへ帰ったギルガメシュの発した言葉となっている。「すべてを見た人」とはギルガメシュその人のことである。

- 57) Heidel, op. cit., p. 17, I.i.19.

- 58) Thompson, op. cit., p. 13, I.iii.41: a-lik ṣa-a-a-di it-ti-ka ^{sa}ḥa-rim-tu saṣam-ḥat u-ru-ma; I.iii.46. ハイデルは “saṣam-ḥat” を普通名詞とするのか, “the prostitute” と訳している。

- 59) Heidel, op. cit., p. 22, I.iv.21.

I. iv. 8 から I. iv. 21まで, ハイデルは慎ましくラテン語で訳している。

- 60) ibid., p. 29, IV.ii.17-18.

- 61) ibid., 35, III.iv.137.

- 62) ibid., p. 44, IV.v.45.

- 63) ibid., p. 51, VI.52

ここには 2 × 7 の強化形が見られる。

- 64) Thompson, op. cit., p. 39, VI.55: VII bêru. ベールは距離単位であり, ハイデルは “double-hour” (2時間で行ける距離) と訳している。

- 65) Heidel, op. cit., p. 51, VI.55.

- 66) ibid., p. 53, VI.103

- 67) loc. cit., VI.111.

- 68) 森を保護するために, 神エンリルがフンババを任命して, 人間に恐怖を与えようとした (Heidel, op. cit., p. 35, III.iv.136-137)。神の立場からすると, フンババを殺されることは, 世界の将来を考えて立てたせっかくの計画が破綻することになり, 神の面子は丸つぶれである。到底そのまま放置できることではない。また, 気に染まぬこととはいえ, 娘にせがまれたアヌは, 天の牛を作って地上に降ろした

インドの文献に見られる7の数

- (Heidel, op. cit., p. 53, VI.113と122の間)。この場合も神の作ったものを人間が破壊したのであるから、これも放置するわけにはいかない。
- 69) Heidel, op. cit., p. 60, VII.iv.10.
- 70) *ibid.*, p. 70, X.ii.8-9.
- 71) *ibid.*, p. 81, XI.28-30: The ship which thou shalt build, Its measurements shall be (accurately) measured; Its width and its length shall be equal.
- 72) *ibid.*, p. 82, XI.57-58: …… one hundred and twenty cubits each was the height of the walls; One hundred and twenty cubits measured each side of its deck.
- 73) *ibid.*, p. 82, XI.61.
- 74) *ibid.*, p. 83, XI.76.
- 75) *ibid.*, p. 85, XI.129-130.
- 76) *ibid.*, p. 86, XI.145-146.
- 77) *ibid.*, p. 87, XI.157.
- 78) *ibid.*, “Summary of the Epic,” p. 9.
- 79) A. Ungnad & H. Gressmann, *Das Gilgamesch-Epos*, Göttingen, 1911, p. 140: Hier scheint das im Orient weit verbreitete Motiv von den “stärksten Dingen” vorzuliegen, das auch in die Dichtungen des Mittelalters gedrungen ist:
- Der Schlaf ist stark, aber der Tod
Ist stärker, als die letzte Not.
- R. W. Rogers, *Cuneiform Parallels to the Old Testament*, New York & Cincinnati, 1926, p. 101: The idea is that if he can master sleep, twin brother of death, he might thus learn to master death itself. But the test is too severe and the hero falls asleep.
- 80) Heidel, op. cit., p. 89, XI.218.
- 81) 『ギルガメシュ叙事詩』に描かれる死後の世界は，“暗黒の世界であり，〔死後世界の女神〕イルカラ (irkalla) の住む所である (Heidel, op. cit., p. 60, VII.33)。入った者は決して出て来ることがない家であり (loc. cit., VII.34)，住む者に光が失われた家である (loc. cit., VII.36)。塵が食べ物であり，粘土が命長らえるための糧である (loc. cit., VII.37)。
- 82) Heidel, op. cit., p. 101, XII.115.
- 83) 息子が一人もない男について，“完全に破滅している”とエンキドゥの魂は言いい (Heidel, p. 100, XII.100-101)，息子が六人いる男についてさえ“書記のようだ”

と言うに過ぎない (loc. cit., XII.111)。息子の数としては最も完全なのは七人である。

- 84) 女についても、「七〔人の子〕の母である」ことが最も結構なこととされている (ibid., p. 60, VII.iv.10)。
- 85) Johannes Hehn, “Zur Bedeutung der Siebenzahl,” *Beihefte zur Zeitschrift für die Alttestamentliche Wissenschaft* 41, 1925, p. 132.
- 86) *The Holy Bible*, Translated out of the original tongues and with the former translations diligently compared and revised by his Majesty’s special command, Authorized King James Version, Oxford, n. d., pp. 1-792.
- 87) ibid., p. 2, a, Genesis 2.1.
- 88) 船の形は同じであるが、『ギルガメシュ叙事詩』では七階であるのに対して (Heidel, op. cit., p. 82, XI.61), 『旧約聖書』では三階になっている (*The Holy Bible*, p. 5, Genesis 6.16)。
- 89) *The Holy Bible*, p. 6, a, Genesis 7.2.
- 90) loc. cit., a, Genesis 7.3.
- 91) loc. cit., a, Genesis 7.4.
- 92) loc. cit., a, Genesis 7.10.

『ギルガメシュ叙事詩』では、不死を求めてやって来たギルガメシュに、ウトナピシュティムが大洪水の物語を語る。この古い物語が『旧約聖書』に継承されている。『ギルガメシュ叙事詩』では人間と動物を全滅させようとエンリル神 (enlil) が洪水を起こし、その一部でも生き延びさせようとエア神 (ea) が舟を作る方法をウトナピシュティムに教え、神々がそれぞれ役割を分担している。

ところが『旧約聖書』では、このような分担制度が消滅した。バビロニアでは別々の神が演じ分けて意地悪役と優しい役が一人二役で演じられる。大勢の神々が手分けしていたのを止め、唯一の神が全てを一手に引き受けるようになるのである。

- 93) loc. cit., b, Genesis, 8.4.

古いバビロニアから伝わる『ギルガメシュ叙事詩』では、人間びいきの神エアの言うことを聞いて大洪水を切り抜けたウトナピシュティムは、褒美として不死を得た。ところが『旧約聖書』では、洪水が終わった後もノアはただの人のままである。それというのも、『ギルガメシュ叙事詩』では神の都合で起こった洪水が『旧約聖書』では人間の罪のせいになっている。何とか切り抜けたのは偉いかも知れないが、もともと自分たちのせいでは起こったのであれば、特典を与えられないのはしかたがない。

- 94) Heidel, op. cit., p. 86, XI.145-146.
- 95) *The Holy Bible*, p. 7, Genesis 8.10.
- 96) loc. cit., Genesis 8.12.
- 97) 夢占いは『ギルガメシュ叙事詩』でも重要なモチーフである。エンキドゥは不思議な夢を見たので、それをギルガメシュに語った (Heidel, op. cit., p. 55, VI.191-194) エンキドゥの見た夢の中で神々が会議を開いている。この部分はアッシリア版に欠けているが、ハイデルはヒッタイト版から補っている。それによると、エンリル神が強硬に主張して、フンババと天の牛を殺した二人のうち、エンキドゥを死なせることに決まる (ibid., pp. 56-57, VII.i.1-22)。夢の通りにことは進展して、エンキドゥは思い病気に罹る (ibid., p. 61, ハイデルがここに置いた破片 6-13)。そして死ぬ。
- 『ギルガメシュ叙事詩』でも『旧約聖書』でも、夢が取り上げられるのは物語に重要な局面の展開がある場合である。バビロニアで夢が意味あるものとなるのは、専門の夢解きが正しく解釈した場合に限られる。『ギルガメシュ叙事詩』で専門の夢解きの役割を果たす賢者はギルガメシュであり、『旧約聖書』ではヨセフである。
- オープンハイムによると、専門の夢解きは夢前兆を集めた本を使うが、アッシュールバニパル (aššurbanipal) の図書館で、この種の「夢の本」が発見されている (Oppenheim, op. cit., p. 222)。
- 98) ibid., p. 38, b, Genesis 41.2.
- 99) loc. cit., Genesis 41.3.
- 100) loc. cit., Genesis 41.4.
- 101) loc. cit., Genesis 41.5.
- 102) loc. cit., Genesis 41.6.
- 103) loc. cit., Genesis 41.7.
- 104) ibid., p. 39, Genesis 41.26.
- 105) loc. cit., Genesis 41.27.
- 106) loc. cit., Genesis 41.29.
- 107) loc. cit., Genesis 41.30.
- 108) この間に「豊饒の七年」への言及が2回ある (Genesis 41.47, 53)。
- 109) *The Holy Bible*, p. 60, a, Exodus 12.15.
- loc. cit., a, Exodus 12.16.
- loc. cit., b, Exodus 12.19.
- ibid., p. 65, b, Exodus 16.26.

- loc. cit., b, Exodus 16.27.
loc. cit., b, Exodus 16.29.
loc. cit., b, Exodus 16.30.
ibid., p. 72, b, Exodus 24.16.
ibid., p. 74, a, Exodus 25.37.
ibid., p. 78, b, Exodus 29.35.
ibid., p. 78, b, Exodus 29.37.
ibid., p. 81, a, Exodus 31.15.
loc. cit., a, Exodus 31.17.
- 110) ibid., p. 93, b, Leviticus 4.6.
ibid., p. 115, a, Leviticus 23.3
loc. cit., a, Leviticus 23.6
loc. cit., a, Leviticus 23.8.
ibid., p. 117, a, Leviticus 25.4.
loc. cit., b, Leviticus 25.8.
loc. cit., b, Leviticus 25.9
- この連続する2節では“六年間は大地を耕作して七年目には休ませよ。七年の七倍を数えよ。四十九年となる。四十九年が終わった五十年目には、奴隷を解放せよ”
と言われ、インド文献に見られる強化形7×7を思わせる。
- ibid., p. 119, b, Leviticus 26.18.
loc. cit., b, Leviticus 26.21.
loc. cit., b, Leviticus 26.24.
ibid., p. 120, a, Leviticus 26.28.
- 111) ibid., p. 146, a, Numbers 19.11.
loc. cit., a, Numbers 19.12.
loc. cit., a, Numbers 19.14.
loc. cit., a, Numbers 19.16.
loc. cit., a, Numbers 19.19.
ibid., p. 150, a., Numbers 23.4.
ibid., p. 151, a., Numbers 23.29.
ibid., p. 155, b., Numbers 28.11.
loc. cit., b, Numbers 28.17.
loc. cit., b, Numbers 28.19.

- ibid., p. 156, a, Numbers 28.24.
loc. cit., a, Numbers 28.25.
loc. cit., a, Numbers 28.27.
loc. cit., a, Numbers 28.27.29.
loc. cit., a, Numbers 29.1.
loc. cit., a, Numbers 29.2.
loc. cit., a, Numbers 29.4.
loc. cit., b, Numbers 29.7.
loc. cit., b, Numbers 29.8
loc. cit., b, Numbers 29.10.
loc. cit., b, Numbers 29.12.
ibid., p. 157, b, Numbers 29.36.
- 112) ibid., p. 181, b, Deuteronomy 16.3.
loc. cit., b, Deuteronomy 16.4.
loc. cit., b, Deuteronomy 16.8.
loc. cit., b, Deuteronomy 16.9.
ibid., p. 182, a, Deuteronomy 16.13.
loc. cit., a,, Deuteronomy 16.15.
loc. cit., a,, Deuteronomy 28.25.
ibid., p. 196, a, Deuteronomy 31.10.
- 113) ibid., p. 204, a,, Joshua 6.4.
loc. cit., b, Joshua 6.6.
loc. cit., b, Joshua 6.8.
loc. cit., b Joshua 6.13.
loc. cit., b Joshua 6.15.
loc. cit., b Joshua 6.16.
ibid., p. 322, b, 1 Kings 8.65.
ibid., p. 336, a, 1 Kings 19.18.
ibid., p. 345, a, 2 Kings 4.35.
ibid., p. 353, a, 2 Kings 11.4.
ibid., p. 354,,a, 2 Kings 12.1.
ibid., p. 542, a, Psalms 119.164.
ibid., p. 556, a, Proverbs 9.1.

- ibid., p. 603, b, Isaiah 30.26.
ibid., p. 742, a, Daniel 4.16.
loc. cit., b, Daniel 4.23.
loc. cit., b, Daniel 4.25.
ibid., p. 743, a, Daniel 4.32.
ibid., p. 783, b, Zechariah 4.2.
ibid., p. 784, a, Zechariah 4.10.
- 114) ibid., p. 624, b, Isaiah, 58.13: If thou turn away thy foot from the sabbath, from doing thy pleasure on my holy day; and call the sabbath a delight, the holy of the Lord, honourable; and shalt honour him, not doing thine own ways, nor finding thine own pleasure, nor speaking thine own words: [14: Then shalt thou delight thyself in the Lord; ……]

蛇 足

仏教と関係がない日本の初七日と四十九日

日本の習俗の一つに死後7日目と49日目に行われる儀礼があり、それぞれ“初七日”(1×7)“四十九日”(7×7)と呼ばれる。今ではこの2回しか行われぬのが普通であるが、本来はこの間に“十四日”(2×7)“二十一日”(3×7)“二十八日”(4×7)“三十五日”(5×7)“四十二日”(6×7)と呼ばれる儀式があり、合計7回にわたって死後儀礼が行われる。“四十九日”と呼ばれる最後の儀式が終わることを“マンチュウイン”(満中陰)と言い、今日でも香典返しの際にこの語が添えられる。

死の直後に進展する事態を説明するに当たって、仏教文献では7の倍数が使われている。そうすると、日本で行われてきた死後儀礼の日程に使われる7の倍数は仏教と何かの関係があるのであろうか。そうではない。「初七日」から「四十九日」に至る死後儀礼は、7日きざみに7回にわたって行われ、7の数を基に日程が体系づけられてはいる。しかしながら、これは日本文化を仏教文化を結び付ける論拠とはならない。

日本では7の数に何の意味もない。そういう文化はもともとなかったし、この数を特別視する文化が異文化圏から取り入れられることもなかった。ところが、仏教圏で7は「必要にして充分な数」を象徴する。死んでから7の倍数の日までに「心の移転」が完了するのである。ただし、このことは死者の遺族の関心事ではない。「心の移転」は自動的に起こり、遺族には手の打ちようがないのである。そもそも仏教文化圏では、

インドの文献に見られる7の数

死ねば死体を焼却して川に投げ捨てるだけで、墓を作る習慣もなければ、死後儀礼を行う習慣もない。

さて、「心の移転」のプロセスを説明するために、仏教では「古い身体から新しい身体へ心を運ぶ臨時の身体」が構想された。日本のタマと違って、仏教の「心」が身体なしに存在することはありえない。そして、7に「必要にして充分な数」を象徴させる文化伝統を受けて、「臨時の身体」の持続日数が $7 \times \alpha$ 日 ($\alpha \leq 7$) とされた。死んでから $7 \times \alpha$ 日以内の不特定の時点で「心の移転」が完了して、用のなくなった「臨時の身体」は消滅する。この繋ぎの身体は限られた時間幅の間だけしか生存せず、古い身体が消滅した時点Aと新しい身体が発生する時点Bとの中間の期間に機能するので、“antrābhava”（中間にあるもの）と言われ、中国では“中有”または“中陰”と訳された。

仏教の体系の中で「心」は常に身体と結び付いている。どんな場合でも、身体を欠いたまま「心」が存在することはありえないのである。したがって、古い身体が死んでから新しい身体が発生するまでは、仮の身体として「中間にあるもの」を構想せざるをえなかった。これだけでも中国人には馴染みにくいことであるから、仮の身体の生存可能な日数として7の倍数が挙げられているとは思にくかった。中国文化圏の人々にとっては、「中間にあるもの」の生存可能な日数を何が何でも決めなくてはならない理由がなかったし、そもそも7という数字は中国人にとって何の意味もないのである。

それでも中国人は何とか文章の含蓄を汲み取ろうとして、“ $7 \times \alpha$ という数字に関連して、死者の霊に重大なことが起こる”と言われていたらしいことに気づいた。そこではたと思いついたのは、「死後 $7 \times \alpha$ 日目に閻魔の判定が下ること」であった。こうして、判決に手心を加えてもらおうとして、 $7 \times \alpha$ 日目に「佛事」を行う習慣ができた。

中国で制度化された「十佛事」の中核を成すのは、死後三年目（2年+ α 日目）に行う「大祥」であり、志磐はこれを次のように説明して、“孔子曰ふ。子、生まれて三年、然して後に父母の懐を免ると。故に報いるに三年の喪を以てす”と言う（『佛祖統紀』33、『大正新脩大藏經』49, p. 320, c.14-19）。これは『論語』「陽貨第十七」からの引用である。中国人はインド文献の中国語訳でたまたま見かけた $7 \times \alpha$ から着想を得て、「孝」の実現を旨とする古来の儀礼を充実させようとしたに過ぎないのである。

ところが日本人にとって、ブツジ（佛事）はブツダウ（佛道）そのものであり、これが仏教に溯ることを疑う者はいなかった。それどころか、古代から現代に至るまで、

同じように仏教と関係がない災い除けの呪術とともに、中国から伝わった死後儀礼はブツダウ（佛道）の中心課題である。

死後に起こる「心の移転」に納得しなかったという点では、中国人も日本人と大して変わらなかったと言えなくもない。しかしながら、馴染めない異文化に接して驚き呆れながらも、少なくとも中国の学者は仏教を理解しようとした。「孝」を実現するパフォーマンスに $7 \times \alpha$ を流用したものの、中国で作られた『中陰經』で、“中陰”/“中有”という語は、「仮の身体」を意味するものとして理解されている（中陰の衆生、形質微細にして、風を飲吸し、壽命七日なり）。

ところが、仏教文献を見て違和感を覚えたり途方に暮れたりした日本人は一人もいなかった。自分たちと違った考え方をする人々がこの世にいるとは思えず、ありのまま異文化を理解しようとはしなかったのである。“中有”/“中陰”という語についても、仏教の体系の中で意味を理解しようとは誰も思わなかった。日本には知的エリートが不在であった。

そして、借用語“チュウイン”/“チュウウ”の意味は「死んでから次の生を受けるまでの間」（『広辞苑』）とされ、独自の用法が日本語に成立した。49日の間は死者のタマが家の屋根か軒の下かに留まるのである。この語が「時間」を指すからこそ、“マン-チュウイン”という表現が成立しえたのである。当然ながら、中国語には“満-中陰”という表現がない。

死に関連して仏教で7の倍数が7通りに設定されたのは、「心」を運ぶ装置が持続しうる時間幅を確定しようとした結果であり、この際にインド人が採用した日数は、西アジアで「必要にして充分な数」の象徴であった7である。そして念には念を入れて、この7をさらに強化した数 $7 \times \alpha$ を万一の場合に備えて用意し、 α の最大値を7とした。ところが、異文化に対する好奇心が希薄な日本人は、よく分からないまま中国文献の記述から“「佛事」を行うのは死後 $7 \times \alpha$ 日目”という箇所だけを抜き取り、自ら古くから継承してきた文化の要請を受けて、死んだ人間のタマを安定させるために呪術を行うべきタイミングを定めた。

人の亡きあととはかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便りあしく狭き所にあまたあひるて、後のわざも営みあへる、心あわたし。日かずにはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。（『徒然草』30、『日本古典文学体系』30, p. 114）

日本では“シヨ-ナヌカ”とか“シジフ-クニチ”とか“マン-チュウイン”という語が使われ、人々はインド伝来の仏教儀礼を行っているつもりでいる。しかしながら、日本でも同じ7の倍数が使われているといっても、借用語“チュウイン”/“チュウウ”

インドの文献に見られる7の数

という語が指すのは、「時間」（死後に経過した日数）であって「物体」（臨時の身体）ではなく、「心の移転」を巡って展開される論議は痕跡さえ認められない。

死の瞬間に起こる「心の移転」に馴染めなかった日本人は、インド文化に深く根差す仏教を採り入れることがなかった。二つの文化の間に横たわる越え難い間隙を考えれば、これは当然での成り行きであって、良いとか悪いとかいう問題ではない。宜しくないのは、この事実を目を向けようとしないことである。日本人は「日本世界はインド世界と文化の一局面を共有する」という途方もない幻想を抱き、自分たちが「世界三大宗教の一〔つ〕」（『広辞苑』）を正しく継承していると頑なに思い込んでいる。

The Number Seven As Seen in Indian Texts

Nobuhiko KOBAYASHI

In Babylonia (BC 2800-1750), the Jupiter, the Mars, the Saturn, the Venus and the Mercury as well as the Sun and the Moon were well observed by astronomers. And seven, the number of the moving heavenly bodies, symbolized “the whole” (kiššatu).

Reflecting this Semitic tradition, the number seven is often used to mean “necessary and sufficient” in the Gilgamesh Epic and the Old Testament. Ordered by Gilgamesh, seven “wise men” lay the foundation of the city wall (Tablet 1, i.19). Seven excellent architects are necessary and sufficient for the perfect construction of the wall. Noah takes by sevens the male and his female of every beast when he embarks on his ark (Genesis 7.2). Seven of each sex are necessary and sufficient for the full restoration of the animal world.

This usage of seven was introduced to India in several centuries before and after Christ when cultural exchange between the West Asia and India was brisk. And it was especially Buddhists that preferred seven or its fortified form forty-nine (7×7).

Buddha took seven steps just after he was born and attained the ultimate truth after meditating for seven years. Devotees are recommended to offer forty-nine lights and flowers of the same number to images of Buddha. This number was believed to be necessary and sufficient for the demonstration of enthusiastic faith.